



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ルーマニアのブルガリア語方言における言語変化について : ブラネシュティ村のブルガリア語方言を例に
Author(s)	菅井, 健太
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 163, 45(左)-76(左)
Issue Date	2021-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.163.l45
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80815
Type	departmental bulletin paper
File Information	1003_bfhhs_163_l45.pdf



ルーマニアのブルガリア語方言における 言語変化について

—— ブラネシュティ村のブルガリア語方言を例に ——

Language Change in the Bulgarian
Dialect of Brănești, Romania

菅 井 健 太

1. はじめに

ルーマニアの首都ブカレストの近郊にはブルガリア系集落が点在している。そのうちの一つであるブラネシュティ村（イルフォヴ県）では、現在に至るまで同村のブルガリア系住民によってブルガリア語方言が維持されている。しかし、ブルガリア語方言話者は高齢者に限られ、それ以外の世代ではルーマニア語への言語シフトが進行している。このような言語状況の背景には何があるかを探るうえで、まず、ブルガリア語方言がどのような状態で維持されているかを解明する必要がある。同村のブルガリア語方言（以後、ブラネシュティ方言と呼ぶ）を保持する高齢者はみなルーマニア語とのバイリンガルであり、それゆえブラネシュティ方言には言語接触によって生じた言語変化が様々な言語レベルにおいて観察される。これまで本稿の筆者は、ブラネシュティ村の現地調査を通じて収集した言語資料をもとに、同村のブルガリア語方言の記述、特にルーマニア語との言語接触に起因する言語変化の記述とその仕組みの解明に取り組んできた（cf. Сугай 2014, 2015ab, 2016ab, 2017ab; Sugai 2018, 2020, etc.）。

10.14943/bfhhs.163.145

本稿では、これまでの研究成果も踏まえながら、Thomason & Kaufman (1991) による言語接触に関する類型論的な枠組みを用いて、言語接触によって生じた言語変化の記述と分析を行い、それによって接触の強度を明らかにすることを目指す。

本稿の構成は次のとおりである。まず、ブラネシュティ村のブルガリア語話者の移住や一般的な言語状況、ブラネシュティ方言の言語特徴について、筆者による現地調査で判明したことも踏まえて概説する。次に、分析のための理論的な枠組みについて確認をしたのちに、ブラネシュティ方言の言語構造には、接触言語であるルーマニア語からどのような借用がどの程度生じているかについて、Thomason & Kaufman (1991) による「借用のスケール」を用いた分析を行う。最後に、本稿における議論を整理し、今後の課題を提示する。

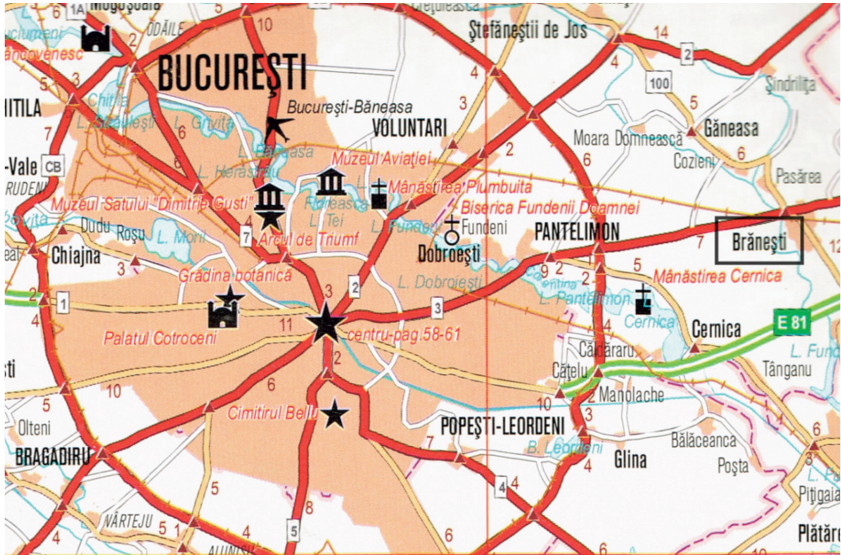
2. ブラネシュティ村とブルガリア語方言

2.1. ブラネシュティ村の住民と現状

ブラネシュティ村はブカレストの中心部からおおよそ 20 km 東に位置し、行政区画としてはイルフォヴ県に属している (cf. 【地図 1】)。

ブカレスト近郊にあるブルガリア系集落には、戦禍やオスマントルコの圧政からの避難、税制の優遇などを理由にドナウ川を渡り (Младенов 1993: 7-11)、ルーマニア側に移住したブルガリア系移民の末裔が暮らしている。本稿が研究対象とするブラネシュティ村もそのような集落のうちの一つである。諸説あるが、ブラネシュティ村へのブルガリア人の最初の移住は、18 世紀末か、遅くとも 19 世紀初頭であったと考えられている (Roman 1984: 137; Bolocan 1958: 491)¹。1831 年には 39 世帯 (131 人) の移住が確認されることから (Велики & Трайков 1980: 246-247)、少なくとも 19 世紀前半にはブラネ

¹ 本稿筆者による現地調査において、最高齢のインフォーマントから得た情報によれば、現在のブラネシュティ村にブルガリア人が到達したのは 1780 年代であるという。



【地図 1】 (Atlas 2011-2012: 44)

シュティ村はブルガリア系集落として確立していたことが推測される。19 世紀の後半になると 1,000 人近くの住人がブラネシュティ村に定住しており、しかもその大多数がブルガリア系住民であったといい (Младенов 1993: 34), 20 世紀前半にはその数は 466 世帯 (2,110 人) にものぼっていたという (Жечев 1983: 59)。1950 年代の半ばにも、ブラネシュティ村には 2,000 人近くのブルガリア人がいたという (Bolocan 1958: 491)。

一方で、本稿筆者が 2012 年から 2017 年にかけて現地調査を行った際には、ブルガリア語を話すことができる話者は 80 歳以上の高齢者にほとんど限定されていることが確認された。このときに得たインフォーマント自身や現地住民らの情報によれば、20～30 年ほど前まで (1990 年代頃まで) は村のいたるところでブルガリア語が話されていたという。ブラネシュティ方言話者はルーマニア語とのバイリンガルでもあり、ルーマニア語も流暢に話す。一方で、彼らの子供の世代にあたる 40～60 代の人々はブルガリア語を聞いてあ

る程度理解するが積極的に話すことはできず、さらにその子供の世代である10～30代はブルガリア語を全く解さない。つまりブラネシュティ村では言語シフトが急速に進んでいる。本稿筆者の確認する限りにおいて、ブラネシュティ村ではブルガリア語保持のための活動は行われておらず、高齢のブラネシュティ方言話者が亡くなってしまったあとには、ブラネシュティ村のコミュニティは完全にルーマニアに同化することが予測される。

ブラネシュティ村のブルガリア系住民は、ドナウ川沿岸に点在しているシリストラ近郊の集落出身者の末裔であると考えられている（cf. Младенов 1993: 34, Еников 1983: 12-13）。いわゆるグレーベンツィ（гребенци）である²。グレーベンツィとは、現在のブルガリア共和国北東の都市シリストラとトゥトラカンの間のドナウ沿岸に点在する集落に住むブルガリア人住民のことであるが、例えば、言語学者・民俗学者であるストヤン・ロマンスキも1906年にブラネシュティ村を訪れ、「ブラネシュティは、真の“グレーベンツィ”のすみかである。」と述べている（Жечев 1983: 59）。

したがって、ブラネシュティ村で話されているのは、ブルガリア北東地域に分布するミジヤ方言群（мизийски говори）の下位方言³にあたるグレーベン方言シリストラ変種⁴である（cf. Младенов 1993: 47, 238-240）。

2.2. ブラネシュティ方言の言語特徴

ブラネシュティ方言には、グレーベン方言シリストラ変種、及び上位のミ

² グレーベンツィという名称は、この地方特有の女性用民族衣装の帽子についている“櫛（グレーベンгребен）”状の構成部分の名称に由来する（Кочев 1969: 5）。

³ ミジヤ方言群の下位方言には、グレーベン方言、ラズグラド方言、シューメン方言があるが（cf. 【地図2】）、この中でもグレーベン方言はそのほかの二つの方言に対して言語的統一性が元来非常によく保たれている（Кочев 1969: 5）。

⁴ Кочев（1969: 5）による用語で、彼は「トゥトラカンとシリストラの両町の間でドナウ川沿岸に位置する南ドブルジャの集落に居住している古いミジヤ住民たちの方言」と定義している。なお、“シリストラ方言”ではなく、“グレーベン方言シリストラ変種”という用語を採用した理由として、シリストラ近郊の集落には、ブルガリアの各地から移住してきた人々の集落も点在しており、これらを“シリストラ方言”としてまとめるには、方言が系統的に多様すぎることを挙げている（Кочев 1969: 6）。

ジヤ方言群一般に典型的な諸特徴を見出すことができる。いくつか重要な特徴を指摘しておく。なお、ブラネシュティ方言は総じて言語統一性をよく保っていることを付言しておく (cf. Bolocan 1958: 491)。

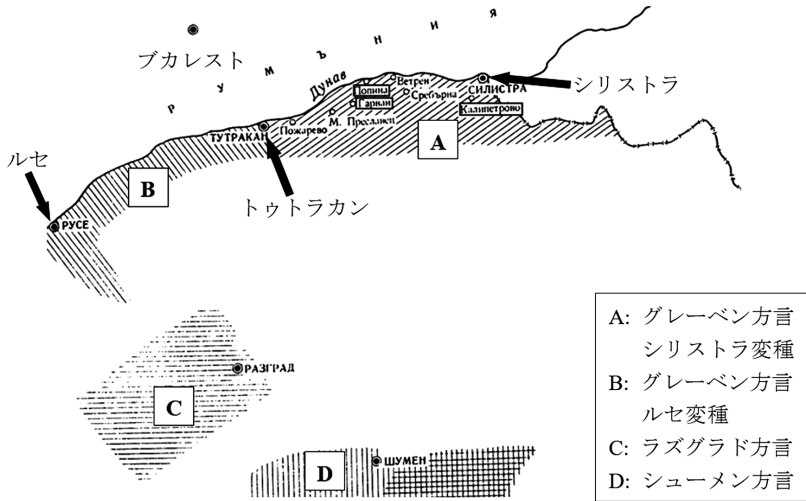
まず、音声のレベルにおいては、ミジヤ方言群を含め、東方言に広くみられる音声的特徴として、アクセントを持たない母音 /a/, /o/, /e/ の弱化がある。この現象には、東方言のなかでも様々なヴァリエーションがあり、一部の母音のみ弱化が見られるような地域もある一方で、北東地域に分布するミジヤ方言群では、3つの母音とも規則的に母音弱化を起こす。/a/ は [ə], /o/ は [u], /e/ は [i] となる完全母音弱化 (пълна редукция) は、ミジヤ方言群に特徴的な現象である (Стойков 1993: 97)。ブラネシュティ方言の場合でも、/a/, /o/, /e/ のすべての母音が、アクセントを持たない場合に母音弱化しうる。

これに加え、アクセントを持つ音節におけるスラヴ祖語の *ъ の反映形は、ブラネシュティ方言では、音環境によって [ˈa], または [e] か [ɛ] である。例えば⁵、「大きい」を意味する男性単数形の形容詞は, гул'ам [gul'am] であるが、複数形では [gulemi] または [gulemi] という形になる。同様の音対応は、ミジヤ方言群とそれに隣接するバルカン方言群の両方にみられる特徴であるが、広母音 [ɛ] による対応についてはミジヤ方言群にのみ特徴的とされる⁶ (Стойков 1993: 102; Тетовска-Троева 1986: 36)。

形態論のレベルにおける特徴としては、定冠詞男性単数形の形式を挙げる

⁵ 以後、例示に際して特に断りがない限り、ブルガリア語 (ブラネシュティ方言を含む) にはキリル文字を、ルーマニア語にはラテン文字を用いる。なお、標準ブルガリア語には正書法に従った表記を行う一方で、ブラネシュティ方言の例にはキリル文字を用いた伝統的な音声表記を適用する。標準語の正書法との違いは主に次の点にある：①ヨット化母音字母 я, ю は用いず、語頭及び母音の後で ъа, ъу, 語中で 'a, 'y で表す。②щ の字母は用いず, шт で表す。③ [w] または [β] を表す字母として ѱ を用いる。④子音の口蓋化を表すためには、アポストロフィ (') を子音の右肩に付す。また、本稿では、特に語の形態論的な分析を行う際に限り、ハイフン (-) は形態素間の境界を表すこととする。本文中で文法情報を標示する場合は、{ } に入れて示すこととする。

⁶ ただし、ブルガリア国内のミジヤ方言群の場合、広母音 [ɛ] は、近年しばしば狭母音に置き換わっているという指摘もある (Стойков 1993: 102; Тетовска-Троева 1986: 36)。



【地図 2】 ミジヤ方言群とその下位方言の分布
(Кочев 1969: 7, 本稿筆者が一部改訂)

ことができる。グレーベン方言シリストラ変種だけでなくミジヤ方言群全体に特徴的な現象として、定冠詞男性単数形がアクセントをとるときに -o [o], アクセントを取らないときに -y [u] となることが知られている (cf. Милетич 1989: 23; Стойков 1993: 102)。この特徴は、グレーベン方言シリストラ変種ではよく保存されているといい (Кочев 1969: 6), ブラネシュティ方言にも同様の特徴を一貫して見いだすことができる⁷。例えば, нус-о「鼻」, дъжд-о「雨」; чил'ак-у「夫, 男性」, гулеми-у「大きな」など。

グレーベン方言は, 二つの下位方言グループに分類される。一方はシリストラ変種で, もう一方はルセ変種である (cf. Кочев 1969)。

⁷ この特徴は, ミジヤ方言群と隣接するバルカン方言群と分かť大きな特徴であると考えられている (Милетич 1989: 23-24)。なぜなら, バルカン方言群では一般的に -ъ [a] という音形を持つためである。しかし, バルカン方言群にも同様の特徴を持つものが一部見られるため, 必ずしもミジヤ方言群だけにみられる特徴とは言えないとの反論もある (cf. Стойков 1993: 102)。

ブラネシュティ方言は、シリストラ変種と同じ特徴を持っている。主要な共通特徴を一つだけ挙げると、ブラネシュティ方言で動詞の未来形を形成する際に用いられる助詞は *ше* または *шъ* である。この助詞はシリストラ変種では *ше* であらわれるが、ルセ変種では *же* であらわれる (Кочев 1969: 7; cf. Тетовска-Троева и др. 2016: 142–143)。

ここまで挙げてきた言語特徴はいずれもブラネシュティ方言がミジヤ方言群中のグレーベン方言シリストラ変種であることを示唆するものである。ブラネシュティ方言は、次節で見るようなルーマニア語との言語接触による影響を被りつつも、移住前の方言特徴を概してよく保持している。

3. 言語接触による変化

3.1. 言語接触と「借用」について

本稿ではブラネシュティ方言に見られる言語構造上の特徴を、ルーマニア語との言語接触による変化の観点から分析する。

言語と言語が接触するとき、一方の言語が他方の言語に、あるいは互いに影響を与えあうことは、よく知られている (cf. Weinreich 1968; Thomason & Kaufman 1991; Thomason 2001; Heine & Kuteva 2005; Matras 2009, etc.)。言語接触による変化は、一方の言語の形式や構造が他方に転移されることによって生じる言語構造における変化によって特徴づけられる。本稿では、Thomason & Kaufman (1991: 21) にしたがって、このプロセスを「借用 (borrowing)」⁸ と呼び、それを「話者の母語への異言語の要素の統合」と理解する⁹。つまり、

⁸ 例えば Matras (2009) はそれを「複製 (replication)」と呼んでいる。というのも、「借用」という用語は、“所有”の意味や言語間の境界が強調されすぎてしまうことで、構造や語形を共有したり、採用・適用するというダイナミックなプロセスであることから注意が逸らされてしまうからであるという (Matras 2009: 146)。

⁹ バイリンガリズムが関与しない場合も念頭に置いており、この点で Weinreich (1968: 1) の言う「干渉 (interference)」とは異なる。一方で、この過程にはしばしばバイリンガリズムが強く関与するのも事実である。特に構造的な借用が行われるには、受容言語に対する長期間かつ広範囲に及ぶバイリンガリズムが必要とされる (cf. Thomason &

受容言語自体は維持されつつも、供給言語の言語構造上の特徴が転移し、受容言語の体系の中に組み込まれることを表す (cf. Thomason & Kaufman 1991: 37)。また、その過程で転移される言語特徴は受容言語の体系の中で変容や適用のプロセスを経る (cf. Matras 2009: 146, 148-149)。言語接触によって生じる言語変化では、語彙の借用がもっとも初めに生じることが知られるが、「供給言語からの長期間にわたる強い文化圧力¹⁰が借用側の言語に対して働くとき、構造的な特徴—音韻論的、音声学的、統語論的な要素、さらには（より稀ではあるが）屈折形態論的な特徴さえ—借用されることもありうる」(Thomason & Kaufman 1991: 37)。したがって、ブラネシュティ方言にみられるルーマニア語から借用された要素の分析を行うことで、ブラネシュティ方言がどの程度の文化圧力を被ってきたかを推し量ることができると考えられる。よって、本稿では、ブラネシュティ方言がこれまでどの程度の接触の状況下で維持されてきたかについて、言語面から明らかにすることを目指すこととする。

この目的を達成するため、本稿では、Thomason & Kaufman (1991: 74-76) によって提案された以下の「借用スケール」を用いて、ブラネシュティ方言に見られる言語構造の分析を行う。

Thomason & Kaufman (1991: 67) は、接触状況が強ければ強いほど、構造的な特徴の借用が広範に及ぶことを指摘している。すでに前章で見たように、ブラネシュティ方言を保持する話者はいずれもルーマニア語とのバイリンガルであるため、語彙的な借用にとどまらず、構造的な借用も行われていることが容易に推察される。借用スケール中のカテゴリー間の境界線は幾分曖昧な部分もありうるが (cf. Thomason & Kaufman 1991: 77)、具体的な言語特徴の記述や対照分析を行うことで、ブラネシュティ方言が被った言語接触や文化圧力の強度の位置づけを行うにあたって十分な示唆を得ることができると考えられる。

Kaufman 1991: 37, 67)

¹⁰ ここでいう「文化圧力」とは「借用を促す社会的な要因」のことを指している (Thomason & Kaufman 1991: 77)。

表 1 借用スケール (Thomason & Kaufman 1991: 74-76 を一部改変・省略)

カテゴリー	接触の強度	言語変化	具体例
I	些細な接触	語彙借用のみ	内容語 (基礎語彙以外の語彙) の借用
II	より強い接触	わずかな構造的借用	機能語 (接続詞など): わずかな音韻・統語・語彙的な意味特徴の借用
III	さらに強い接触	より多くの構造的借用	機能語 (前置詞・後置詞), 派生接辞, 人称代名詞, 指示代名詞などの借用; 音韻化, 若干の語順の変化
IV	強力な文化圧力	かなりの構造的借用	新たな音韻論的な弁別特徴, 語順の変化の拡大, 屈折接辞及び文法カテゴリーの導入
V	極めて強力な文化圧力	重度の構造的借用	類型論的な構造変化

3.2. 分析

本節では, ブラネシュティ方言の接触による言語変化を具体的に分析していく。なお, 分析に当たり, 語彙, 拘束形態素, 文法形式・意味, 統語構造の借用の 4 段階に分けて見ていくことにする。

3.2.1. 研究対象の言語資料

本稿の分析で対象とするブラネシュティ方言の言語資料は, 2012 年～2015 年の間に本稿筆者によって実施された現地調査で得られたものである。ブラネシュティ方言話者であるインフォーマントと調査者との間の自由対話を録音する形で収集した音声資料を書き起こして, 分析データとした。インフォーマントの ID と誕生年は以下の通りである。

表 2 ブラネシュティ方言のインフォーマント

男性	DD (1925), DM (1931), GG (1932), DG (1935), AG (1936), RUS (1955), DF (1934)
女性	BP (1930), BV (1932), TO (1932), TM (1939), BA (1938), TF (1935), TMita (1930)

3.2.2. 語彙の借用

接触の程度が最低限、すなわち文化的圧力がないか、非常に弱い場合に生じる言語変化（カテゴリーⅠ）は、語彙の借用に限られる。それもいわゆる基礎語彙以外の内容語であることが一般的である。ブラネシュティ方言におけるルーマニア語の借用語は多岐にわたるが、そのうち内容語が占める割合は非常に高い。まず、名詞について注目すべき点は、基礎語彙に相当するような語彙の借用も多く観察されることである。例えば¹¹、親族名称にあたる Br. *пъринци* (< Ro. *părinți*, cf. SB. *родители*)「両親」、непот/непоатъ (< Ro. *nepot/nepoată*, cf. SB. *внук/внучка*)「孫／孫娘」、веришор/веришоаръ (< Ro. *verișor/verișoară*)「従弟／従妹」、сокру/соакръ (< Ro. *socru/soacra*, cf. SB. *свекър/свекърва*)「義父／義母」が挙げられる。ただし、これ以外の親族名称（例えば、「父」「母」「兄弟」「姉妹」など）に対しては、どのブラネシュティ方言話者も元来のブルガリア語の語彙を規則的に用いている。この他、生活に身近な物や事象を表す名詞もルーマニア語にとって代わっているものが多いことも指摘できる。Br. *скаун* (< Ro. *scaun*, cf. SB. *стол*)「椅子」、Br. *тимп* (< Ro. *timp*, cf. SB. *време*)「時間、天気」、Br. *шкоаль* (< Ro. *școală*, cf. SB. *училище*)「学校」、Br. *спитал* (< Ro. *spital*, cf. SB. *болница*)「病院」、Br. *поза* (< Ro. *poză*, cf. SB. *снимка*)「写真」、Br. *царъ* (< Ro. *țară*, cf. SB. *държава*)「国」、Br. *лимба* (< Ro. *limbă*, cf. SB. *език*)「言語」など。

また、これらの借用語がすべての話者に普遍的に見られるということはまれである。一人の話者がルーマニア語の語彙とそれに対応するブルガリア語の語彙を併用することのほうが一般的で、両言語に由来する語彙の使用の割合は話者によって異なる傾向がみられる。ブルガリア語を特によく保持している話者（例えば、インフォーマント中で最年長の DD）などでは、全体的にルーマニア語の借用語を用いることが少ない。

¹¹ 以後、用例で用いる言語名の略語は次の通り：Br. ブラネシュティ方言、Ro. ルーマニア語、SB. 標準ブルガリア語、Gr. (ブルガリア語) グレーベン方言。これ以外の略語については、本稿の最後に付した略語一覧を参照のこと。

また、名詞と比較して概して少ないが、形容詞が借用されることもある。例えば、Bг. фрумос (< Ro. frumos, cf. SB. хубав)「美しい」や Bг. либер (< Ro. liber, cf. SB. свободен)「自由な」、Bг. линишит (< Ro. liniștit, cf. SB. тих)「静かな」などである。

副詞は比較的多くの借用語を見出すことができ、またそれらは頻繁に用いられる。例えば、Bг. foarte (< Ro. foarte, cf. SB. много)「非常に」、Bг. мереѹ (< Ro. mereu, cf. SB. винаги)「常に」、Bг. аша (< Ro. așa, cf. SB. така)「そのように」、Bг. дуар (< Ro. doar, cf. SB. дори)「～さえ」、Bг. нумай (< Ro. numai, cf. SB. само)「～だけ」、Bг. май (< Ro. mai, cf. SB. още)「さらに」、Bг. адикъ (< Ro. adică, cf. SB. тоест)「つまり」、Bг. акась (< Ro. acasă, cf. SB. въкъщи)「家に」などが見られる。興味深いことに、これらのルーマニア語起源の語彙は規則的に用いられる傾向にあり、対応するブルガリア語の語彙が用いられることはまれである場合が多い。さらに、複数の語の結合から成る副詞句が借用される例もある。Bг. де лок (< Ro. de loc, cf. SB. съвсем)「全く」、Bг. де аколо (< Ro. de acolo, cf. SB. оттам)「そこから」などである。

ブラネシュティ方言に見られるルーマニア語由来の借用語のなかには、すでに述べた内容語に限らず、借用スケールにおいてカテゴリーⅡに相当する機能語の借用も多い。借用されている機能語の中で最も種類が多く、使用頻度も高いものは、接続詞である。例えば、Bг. sau (< Ro. sau, cf. SB. или)「あるいは」、Bг. ши (< Ro. și, cf. SB. и)「そして」、Bг. къ (< Ro. că, cf. SB. че)「～ということ」、Bг. дакъ, дако¹² (< Ro. dacă, cf. SB. ако)「もし～ならば」、Bг. финкъ (< Ro. fiindcă, cf. SB. понеже)「なぜなら」、Bг. деч' (< Ro. deci, cf. SB. затова)「したがって」、Bг. нич' (< Ro. nici, cf. SB. нито)「～もまた…」を挙げることができる。

前置詞では、Bг. дупъ (< Ro. după, cf. SB. след)「～の後に」や Bг. пъ (< Ro. pe, cf. SB. на)「～の上に、～を」が確認された。後者については、ルーマ

¹² Bг. дако は、ルーマニア語の *dacă* と、それに対応するブルガリア語の *ако* が融合した形 (**da-* + *-ko*) であると推定される。

ニア語で対格標識として用いられることもあり、この借用については、3.3.4. 「文法形式・意味の借用」において詳述する。

これまで挙げてきたもの以外で、特筆すべきは人称代名詞の借用である。確認された例は少ないが、これは借用スケールではカテゴリーⅢに相当するものである。1つ目の例は、人称代名詞の非接語形与格の *Br. mie* (< *Ro. mie*, cf. *SB. на мене* {1.SG.DAT}) である。以下の2例が確認された。

- (1) a. *Mie mi e dragu. (BA)*

I.DAT I.DAT.CL be.PRS.3SG glad

「私は嬉しい。」

- b. *Нъ mie ми харесъў топлу. (Rus)*

DM I.DAT I.DAT.CL like.PRS.3SG hot

「私は（料理は）温かいのが好きだ。」

標準ブルガリア語に限らず、ブラネシュティ方言でも、非接語形の人称代名詞1人称単数与格には、*SB./Br. на мене* という形を使うのが一般的である。しかしながら、上記(1)の例では、それに対応するルーマニア語の *Ro. mie* が用いられている。また、(1b)では、ブルガリア語で与格標識として機能する前置詞 *нъ* (< *на*) を添えて、冗長的に与格標示を行っていることは注目に値する。元来、統合的な与格形であるルーマニア語の借用語 *mie* に対して、ブルガリア語の分析的な形式を適用させた例と見ることができる¹³。これに加えて、人称代名詞接語形で、ルーマニア語の借用語を用いている例も見られた。

- (2) *Мумичиту... той о пурасти. (DG)*

girl.N.SG.DEF he.NOM she.ACC.CL raise.AOR.3SG

「その女の子は、彼が育てた。」

¹³ ブルガリア語の非接語形与格は、次の通り、非接語形対格に与格標識の前置詞 *на* を添えることで分析的に形成される。*SB. мене* {1.SG.ACC} — *на мене* {1.SG.DAT}。

上記(2)は、左方転移された мумичиту「その女の子」を、接語形の人称代名詞によって繰り返しているいわゆる接語形代名詞による二重化 (clitic doubling) の例であるが¹⁴、ルーマニア語に由来する接語形の人称代名詞 3 人称単数女性対格 о が、ブルガリア語の SB. я に代わって用いられている¹⁵。ここで見た人称代名詞の借用は、ブラネシュティ方言の中でもまれであり、一般的にはブルガリア語本来の人称代名詞が規則的に用いられる。しかし、使用頻度が低いとはいえ、代名詞の借用が観察されるという点において、ブラネシュティ方言が接触の影響を強く受けているということ、またそれゆえルーマニア語との接触の程度が高い水準にあったことが示唆される。

次に、翻訳借用による例を確認していく。ブラネシュティ方言には、ルーマニア語からの翻訳借用が多数みられる。例えば、Br. имам ... годин (< Ro. a avea ... ani, cf. SB. съм на ... години)「…歳である」は、ルーマニア語で用いられる語の音形をそのまま借用するのではなく、ブラネシュティ方言 (ブルガリア語) でそれと同じ意味を持つ語を同じ組み合わせで用いることによって、同じ意味を表している。Br. давам телефон (< Ro. dau telefon, cf. SB. телефонирам)「電話する」や Br. ми е страф (< Ro. mi-e frică, cf. SB. страх ме е)「私は怖い」も同様である。加えて、部分的な翻訳借用によって成立しているものとしては、例えば Br. пъ долу (< Ro. pe jos, cf. SB. пеша)「徒歩で」があり、ルーマニア語の前置詞 pe は、それに相当するブルガリア語の語に置き換えられることなくそのまま借用されている一方で、Ro. jos「下に」はそれに対応するブルガリア語固有の語 (Br. долу) に翻訳され、この組み合わせで元のルーマニア語の副詞句と等価の役割を果たす副詞句が形成されて

¹⁴ なお、мумичиту [N. SG] と о [F. SG] は、文法性の一致を見ないが、ここではいわゆる意味的な一致 (semantic agreement) を起こしていると考ええる。これは、ブラネシュティ方言だけでなく、標準ブルガリア語の話し言葉などでもしばしば見られる。

¹⁵ 本来期待される形は、中性単数対格の SB. ro であるため、語頭の子音 r が脱落した形で表れている可能性も排除できないが、ブラネシュティ方言では、アクセントを持たない接語形は母音弱化を伴うためもっぱら Br. ry で現れる。ゆえに、ここで出ている о はルーマニア語の接語形代名詞の女性単数形が借用されたものである蓋然性が高い。

いる。また、ルーマニア語の接続詞 *ca* は、あとに接続法を従える *ca să* の形で「～するために」を表すが、これに相当する構造である *Bg. ка да* (< *Ro. ca să*, cf. *SB. за да*) 「～するために」がブラネシュティ方言でも広く用いられている。ルーマニア語で接続法を導入する助詞 *să* が、ブルガリア語で等価の *да* によって置き換わっていることからわかるように、部分的な翻訳借用が生じているとみることができる。これらの構造がブラネシュティ方言に生じた背景には、もともとブルガリア語に同様の機能を持つ同等の構造 (*SB. за да*) が存在することがあると推測される。これと似たようなことは、*фъръ да* (< *Ro. fără să*, cf. *SB. без да*) 「～せずに」にもみられるわけだが、これらが内容語というよりは機能語に相当するものであることは注目に値する。

ここまで述べた語彙レベルの借用について整理する。内容語は、翻訳借用も含め、ルーマニア語に起源を持つ語彙は多岐にわたってみられる。一方で、機能語の借用はそれに比すると少ないものの、接続詞を中心に広く用いられていることが確認できた。以上より、語彙レベルの借用については、借用スケールに照らし合わせると、人称代名詞の借用のようなカテゴリーⅢに分類されるものも見られるが、類例の少なさを考慮すると、概ねカテゴリーⅡに相当すると見ることができる。

3.2.3. 拘束形態素の借用

次に、ブラネシュティ方言にみられる拘束形態素の借用について見ていく。ルーマニア語から借用された場合であっても、語形変化に際しては原則としてブルガリア語の屈折接辞が用いられる。例えば、「お金」を意味するルーマニア語の *bani* [pɫ] は、ブラネシュティ方言では *бануви* [pɫ] となり、ルーマニア語の複数形語尾 *-i* に代わって、ブルガリア語の複数形語尾 *-уви* が用いられる (*Bg. бан-уви*, cf. *Ro. ban-i*)。他にも、*Bg. тимп-уви* (cf. *Ro. timp-uri*) 「時代」や *Bg. сервис-уви* (cf. *Ro. servici-i*) 「仕事」などがある。後置定冠詞についても同様である。例えば、*Bg. бѣят-у* (cf. *Ro. băiat-ul*)¹⁶ 「少年」や *Bg.*

¹⁶ ただし、ルーマニア語の男性単数形の後置定冠詞 *-ul* はしばしば末尾の子音を落として

шкоаль-**та** (cf. Ro. școal-a) 「学校」, Br. пъринци-**те** (cf. Ro. părinți-i) 「両親」など。このように、借用された語は受容言語であるブラネシュティ方言においては語幹として扱われ、それらの語形変化の際に要する屈折接辞は受容言語であるブラネシュティ方言本来のものが適用される (cf. Thomason & Kaufman 1991: 37)。

動詞についても、それらはあくまで語彙的な意味を受け持つ語幹として借用され、文法的な特徴を標示する語尾にはブルガリア語固有の屈折接辞が用いられる。

- (3) a. Ти мулцум'аскъ-м мл'огу. (BV)
 you.DAT thank-PRS.1SG very_much
 「あなたに大変感謝しております。」
- b. Дъ съ пуз'аскъ-ми? (TF)
 SMP REF take_a_picture-PRS.1PL
 「(我々は) 写真を撮りましょうか?」
- c. ...уттаждът да съ плимбъ-т съз мончетта. (TM)
 go.PRS.3PL SMP REF walk-PRS.3PL with boy.PL.DEF
 「(女の子たちは) 男の子たちと散歩に出かける」

ルーマニア語起源の動詞を語幹として、上記 (3a) では現在 1 人称単数形の語尾 -м, (3b) では現在 1 人称複数形の語尾 -ми, (3c) では現在 3 人称複数形の語尾 -тが用いられている。一方、ルーマニア語の語尾が、ルーマニア語の借用語やブルガリア語固有の動詞に対して用いられるケースは見られなかった。なお、(3a) で用いられている語幹が、ルーマニア語の接続法 3 人称の形に由来する点は注目に値する (Br. мулцум'аскъ- < Ro. mulțumească {SUB.PRS.3SG/PL} < a mulțumi {INF})。借用に際して直説法の現在語幹ではなく、接続

単に [u] と発音されるため、この点においてグレーベン方言の後置定冠詞形 -y [u] と形式の上で合致することになる。それゆえ、ルーマニア語の借用語の場合には、ブルガリア語固有の後置定冠詞かどうかの判断は難しい部分がある。

法の現在語幹が用いられる理由は、後者で用いられる 3 人称の語尾 *-ă /ə/* が、ブルガリア語で生産性の高い第三変化動詞に属する動詞の語幹末に現れるテーマ母音 *-ъ [ə]*¹⁷ と、バイリンガル話者によって同一視されたことによるものと考えられる¹⁸。その結果、ルーマニア語で語尾 *-ă [ə]* を伴った語形全体（語幹＋語尾）が、ブラネシュティ方言では語幹として再解釈されたと考えられる。他にも例えば、Br. прим’аскъ-м (< Ro. primească {SUB.PRS.3SG/PL} + Br.-м {IND.PRS.1SG}), Br. серв’аскъ-м (< Ro. servească {SUB.PRS.3SG/PL} 「サービスする」 + Br.-м {IND.PRS.1SG}), Br. округ’аскъ-м (< Ro. ocrotească {SUB.PRS.3SG/PL} 「擁護する」 + Br.-м {IND.PRS.1SG}) など多数確認され、いずれの動詞も人称変化に際して接尾辞 *-easc-* を伴うタイプのルーマニア語動詞¹⁹ からの借用である。しかし、これとは元来異なる接尾辞をとる動詞においても、同じ接尾辞 *-easc-* を語幹に持つ動詞が見られる。例えば、Br. пуз’аскъм 「写真を撮る」は、ルーマニア語の同じ意味の動詞 *a poza* に由来するが (cf. SB. снимам), 接続法現在 3 人称は *poz-ez-e* となる一方で、直説法現在 3 人称は *poz-eaz-ă* となる²⁰。すなわち、接続法の形はもとより、直説法の形においても接尾辞 *-easc-* をもたない (Ro. **poz-easc-ă*)。それにも関わらず、ブラネ

¹⁷ 元来、このテーマ母音は、*/a/* であるが、アクセントを持たない音節であるため、ブラネシュティ方言では原則として母音弱化を起こして *[ə]* として表出する。

¹⁸ 例えば、ルーマニア語の動詞 *a mulțumi* 「感謝する」は、直説法現在 3 人称単数形で *mulțumești-e* となるのに対して、接続法現在 3 人称単数・複数形では *mulțumească-ă* となる。後者の語尾 *-ă [ə]* が、ブラネシュティ方言の動詞の語幹末のテーマ母音 *-ъ- [ə]* と認識されたために、ブラネシュティ方言では後者の接続法現在 3 人称の形を語幹として採用したと推定される。なお、当該のタイプの動詞で *-ă* の語尾を持つのは接続法現在 3 人称形に限られる。

¹⁹ ルーマニア語で第四変化動詞に分類される動詞のうちの一部が人称変化に際して、接尾辞 *-esc-* (後続する音節の母音によって接尾辞に音交替を伴うため *-ești-/ -easc-* の異形態をもつ) をとる。(e.g. 直説法現在 *mulțum-esc-ø* {1SG}, *mulțum-ești-i* {2SG}, *mulțum-ești-e* {3SG}, 接続法現在 *mulțum-ească-ă* {3SG})

²⁰ ルーマニア語で第一変化動詞に分類される動詞のうちの一部が人称変化に際して、接尾辞 *-ez-* (後続する音節の母音によって接尾辞に音交替を伴うため *-eaz-* という異形態をもつ) をとる。(e.g. 直説法現在 *poz-ez-ø* {1SG}, *poz-ez-i* {2SG}, *poz-eaz-ă* {3SG}, 接続法現在 *poz-ez-e* {3SG})

シュティ方言の当該の動詞の語幹はпуз’аскъ- となっている。同様のケースは、他にも Вг. режистр’аскъ- (Ro. < înregistr-eaz-ă {IND. PRS.3.SG/PL}, *înregistr-easc-ă) 「録音する」などに見られる。このように、借用元のルーマニア語の動詞が人称変化に際して接尾辞 -easc- をとらない場合であっても、ブラネシュティ方言ではそれに関係なく接尾辞 -’аскъ- (Ro. < -ească) を適用しているのである。つまり、当該の接尾辞がブラネシュティ方言においてある程度の生産性を獲得していることが示唆されている²¹。ゆえに、ルーマニア語の動詞の語幹形成に用いられる接尾辞、すなわち拘束形態素の借用の例と見ることができよう。

しかし、接尾辞をとらない動詞であっても、語尾に -ă をとる動詞はそのままブラネシュティ方言に動詞の現在語幹として借用される。(3c) を例にとると、Вг. плимбъ- < Ro. plimbă {IND.PRS.3SG} (< a plimba {INF}) 「散歩させる」や Вг. ажутъ- < Ro. ajută {IND.PRS.3SG} (< a ajuta {INF}) 「助ける」のように直説法現在形に由来する場合も、Вг. кондукъ- (< Ro. conducă {SUB.PRS.3SG/PL} < a conduce {INF}) 「指導する」や Вг. традукъ- (< Ro. traducă {SUB.PRS.3SG/PL} < a traduce {INF}) 「翻訳する」などのように接続法現在形に由来するものも見られる。このことはルーマニア語の語尾 -ă [ə] が、バイリンガル話者によってブルガリア語のテーマ母音 -ъ- [ə] として認識された結果、ルーマニア語の語尾を含めた語形が、ブラネシュティ方言で語幹として再解釈されたものによることを裏付けている。

このほかに、ルーマニア語からの拘束形態素の借用の例として不定代名詞

²¹ ただし、当該の接尾辞が適用されるのは、ルーマニア語の借用語に限られ、ブルガリア語固有の語彙へ適用されるほどその用法は拡大していない。一方で、Вг. служ-аскъ 「礼拝をおこなう」については、ブルガリア語の動詞 SB. служи の語幹 служ- に、当該のルーマニア語起源の接尾辞（及び現在3人称単数形のゼロ語尾）が付された形と見ることができるのだが、ルーマニア語にも対応する動詞 a sluji 「礼拝をおこなう」（もともとスラヴ語からの借用）があるため、この変化形に由来するものともみなしうる。一方で、このような語彙の共通性や同族性（その起源がどちらの言語にあったにせよ）もまた、当該の接尾辞の借用を促進した背景にあるものと推察できよう（cf. Weinreich 1968: 32）。

を形成する形態素 Ro. ori- がある。

- (4) a. Ac ми аресъѣ оркот дако и зъ
 I.NOM I.DAT.CL like.PRS.3SG anything if even about
 п'ес'ен, пуйѣ оркот. (BV)
 song sing.PRS.1SG anything
 「私は歌に関することでありえさえすればなんでも好きだ。なんでも歌う。」
- b. Убе дъ знаш оркъфт из'ик'. (BV)
 good SMP know.PRS.2SG any_kind_of.M.SG language.M.SG
 「どんな言語でも知っていることは良いことだ。」

(4a) の Br. оркот は、ルーマニア語では orice 「どんな～でも」が対応する²²。後者は ori-ce という2つの形態素から成り、前者の ori- が不定代名詞を形成する接辞で、後者の ce は「何」を意味する疑問詞である。ブラネシュティ方言の Br. оркот についても同様の構造をしている (ор-кот)。なお、この不定代名詞は標準ブルガリア語では SB. каквото и да е、ブラネシュティ方言と同系統のグレーベン方言シリストラ変種では Gr. коту бѣди という複合形によって表される (Кочев 1969: 64)。したがって、標準ブルガリア語の и да е、グレーベン方言の бѣди に相当する要素が、不定代名詞を形成するという点で機能的に等価であるルーマニア語の派生接辞である ori- に起源を持つ ор- によって置き換えられたことによって生じたものである²³。また、ルーマニ

²² このタイプの不定代名詞は、ルーマニア語と接触のある他のブルガリア語方言でも広く確認されている (Младенов 1993: 273, 386, cf. Димчев 1974: 256-257)。ゆえに、ブラネシュティ方言においてもルーマニア語との接触で生じた借用であることが強く示唆される。

²³ なお、Ro. ori- [or'] ではなく、Br. op- [or] で借用されていることからわかるように、[r'] はブラネシュティ方言で非口蓋化子音 [r] で対応している。これには、ブラネシュティ方言で [r] が、語末あるいは母音 (主に後舌) の前にしか現れないという出現する音環境に制約があることが関与していると思われる (cf. Младенов 1993: 254)。

ア語由来の派生接辞が、ルーマニア語の借用語ではなく、ブルガリア語固有の語彙に対して適用されているという点は特筆に値する。この点で、ルーマニア語の借用語に対してのみ適用されうる前出の動詞接尾辞 *-'аскъ-* とははっきりと異なる。一方、(4b) の Вг. *оркъфг* のように、語形変化を持つものは元来そうであるように²⁴、ブルガリア語の語尾を用いた語形変化を行う。例えば、単数女性形 *оркѣ-а-ту рабуѣ* {F.SG} 「どんな仕事でも」となる。この例に見られるように、ルーマニア語に由来する派生形態素 *ор-* を伴う場合であっても、ブルガリア語本来の屈折接辞が適用される。

不定代名詞の語形成の際に見られる形態素 *ор-* の借用が生じた背景について考察を行うと、まず、*ori-* という形態素自体が、接続詞の *ori* 「または、あるいは」に由来するため、形態素の境界が話者によってははっきりと意識されやすく、潜在的に独立性が高い。それゆえ、*ori-* はもともと比較的借用されやすい形態素であると言える。加えて、ブルガリア語の不定代名詞 *нещо* (< *не- + що*) 「何か」や *някакъв* (< *ня- + какъв*) 「何らかの」は、語形成にあたって派生接辞の *не-* や *ня-* を後接させる。ルーマニア語の場合も、*ori-* が後接されるという点で共通しており、語形成の点でブルガリア語にとって元来馴染みやすい構造をしていることが指摘できる²⁵。このような語形成における類型論的な構造の類似は、言語接触を通じた当該の借用を促進する上で重要な意味を成したと考えることができる (cf. Thomason & Kaufman 1991: 72, 98)。

ここまで見てきた通り、ブラネシュティ方言は、ルーマニア語との接触の結果、語彙の借用にとどまらず拘束形態素である派生接辞の借用も行ってい

²⁴ 例えばグレーベン方言シリストラ変種では次のように変化する：Gr. *къф-ѣ-ту бѣди* {M.SG}, *къв-а-ту бѣди* {F.SG}, *къв-ѣ-ту бѣди* {N.SG}, *къв-и-ту бѣди* {PL} (cf. Кочев 1969: 64)。

²⁵ このことは、ルーマニア語の不定代名詞 *ceva* (< *ce + -va*) 「何か」や *undeва* (< *unde + -va*) 「どこか」のように、前接辞 (*-va*) によって派生する借用の例がブラネシュティ方言に見られなかったという事実が暗に裏付けている (cf. **шту-ва*, Вг. *не-шту* 「何か」)。

る。ゆえに、ブラネシュティ方言とルーマニア語の接触は、借用スケールではカテゴリーⅢに相当する比較的強いものであったことが伺える。ただし、名詞類における性・数を標示する語尾や、動詞における人称語尾のようないわゆる屈折接辞の借用は見られず、それらには一貫してブルガリア語固有の屈折接辞を用いていることから、カテゴリーⅣに到達するほどのものではないと考えられる。

3.2.4. 文法形式・意味の借用

次に、文法形式・意味の借用について検討する。

ブラネシュティ方言には、対格を標示する独特な構造が見られ、それにはルーマニア語で対格標識の機能を持った前置詞 *pe* の借用が関与している。このような機能語の借用自体は、借用スケールでⅡに相当するにすぎないように思われるが、実際にはそれがもたらされたことでブラネシュティ方言の文法構造にも大きな影響を与える結果となっている点に着目したい。

ブラネシュティ方言ではもっぱら *пъ*²⁶ という形で現れる当該の前置詞は、借用元のルーマニア語の *pe* がそうであるように非接語形の人称代名詞対格と義務的に共起する (5a)。

- (5) a. Вг. Кой тъ дунесъ²⁷ пъ тебе
 who.NOM you.ACC.CL bring.AOR.3SG AM you.ACC
 тук?
 here

²⁶ ルーマニア語のモンテニア方言（ブラネシュティ村が位置するルーマニア南東部のモンテニア地域に分布する方言）では、前置詞 *pe* の母音 /e/ が母音弱化の結果 [ə] となる（Алексова 2004: 59）。ブラネシュティ村で話されるルーマニア語も前置詞 *pe* は [pə] と発音されるため、ブラネシュティ方言にはこの音形がそのまま借用されたと考えられる。

²⁷ SB. донеса は無生の名詞句を直接補語として「(物を) 持ってくる」の意味しか持たないが、Вг. дунесъ は (5a) にあるように直接補語として有生の名詞句もとることができる。これは対応する Ro. a duce が持つ「(人) を連れてくる、(物を) 持ってくる」の意味のうち前者が転移したことによるものとみられる (cf. Младенов 1993: 416)。

b. Ro. Cine te- a dus
 who.NOM you.ACC.CL have.PRS.3SG brought
 pă tine aici?
 AM you.ACC here
 「誰があなたをここに連れてきたのか。」(BP)

またこのときに、**пъ**を伴う人称代名詞対格の非接語形は、性・数・格で一致する同一指示の接語形によって二重に標示される(Сугай 2014 ; Sugai 2018; cf. Сугай 2015a)。(5a)では、**пъ тебе**「あなたを」を同一指示の非接語形 **те**「あなたを」が後方照応的に標示している。これによって、ブラネシュティ方言では、非接語形の人称代名詞対格によって標示される直接補語は、対格標識の **пъ**に加えて、同一指示の接語形によっても標示する仕組みを確立している。なお、(5b)は、(5a)の発話を本稿筆者が聞き取れなかったため、全く同じ内容をインフォーマントがルーマニア語で繰り返して言いなおしたもののだが、ここに(5a)と全く同等の構造を認めることができる。つまり、ルーマニア語の対格標識の前置詞 **pe**の借用に伴ってブラネシュティ方言に生じた、非接語形の人称代名詞対格を冗長的に対格標示し、またそれを接語形によって統語的に二重に標示するという構造は、ルーマニア語からの文法形式の借用とみることができるであろう。

このような構造的な借用が行われた背景には、接語形代名詞による直接補語の二重標示という現象が元来ブラネシュティ方言と同系統のグレーベン方言だけでなく、ブルガリア語諸方言に広く存在していることが挙げられる。ただし、ブラネシュティ方言とは異なり、その使用は語用論的に条件付けられているほか(Сугай 2017b; Sugai 2019)、そもそも前置詞 **пъ**のような対格標識は存在せず、ゆえにそれが当該の構造に関与することはない。つまり、ブラネシュティ方言のそれは、前置詞 **пъ**が関与している点、また接語形による二重使用が高度に文法化されているという点において、ブルガリア語に固有の接語形代名詞による二重使用の構造とは特徴を明らかに異にする(cf. Sugai 2018, 2019)。しかしその一方で、接語形代名詞による二重使用という

構造が制限的とはいえもともとブルガリア語に存在していたからこそ、ルーマニア語の当該構造の借用がブラネシュティ方言において促進されたと考えられる (cf. Thomason & Kaufman 1991: 72, 98; Heine & Kuteva 2005: 45-46, etc.)²⁸。

さらに、ルーマニア語からの借用語である *пъ* に代わって、対格標識として *Br. нъ* が用いられる場合がある。ルーマニア語の前置詞 *pe* がブルガリア語では *SB. на* にあたるため、音形をそのまま借用した *пъ* の代わりに用いられる、いわゆる翻訳借用と考えられる²⁹ (cf. Младенов 1993: 381; cf. also Sobolev 2008: 116-118; Шклифов 1973: 123-124)。

(6) a. *Ас, нъ тес, койетту ни в'арўът у Госпот, <...>*
 I.NOM AM this.PL REL.PL NEG believe.PRS.3PL in Lord

ни ги штък. (BV)

NEG they.ACC.CL want.PRS.1SG

「私は、主を信じない人々のことを望まない。」

b. *...тѣй дъ помниш нъ д'аду. (DD)*

...SO SMP remember.PRS.2.SG AM grandfather

「(あなたが) じいさんのことを覚えていられるように。」

²⁸ 例えば、Heine & Kuteva (2005: 45-46) は、接触に由来する新しい構造は通常ゼロから現れることはなく、むしろそれらは受容言語において既存の構造が基盤となって用法を拡大することで誕生することを指摘している。

²⁹ なお、Кочев (1969: 85) は、グレーベン方言シリストラ変種の前置詞 *нъ* の用法中に、ここで論じている対格標識の *нъ* に相当すると思われる例を挙げ、ルーマニア語の影響の可能性を指摘している。しかし、多義的な *нъ* の例の一つとして挙げているにとどまり、その詳細に立ち入っていない。ブルガリア国内のグレーベン方言シリストラ変種で、このような用法が見られること自体は、それがルーマニア語との言語接触によるものであることをただちに否定することにはならない。なぜなら、同方言が話されるシリストラ周辺地域を含む南ドブルジャ地方は、一時期ルーマニア領であったことがあり（第二次バルカン戦争後のブカレスト条約によって同地域がルーマニアに編入された 1913 年から、第二次世界大戦中にクライヨーヴァ協定でブルガリアに返還される 1940 年までのおよそ 30 年間）、その間はルーマニア語が公用語となったため、ある程度のルーマニア語の影響がグレーベン方言シリストラ変種に認められることが知られているためである (cf. Младенов 2008: 310-311)。

ブラネシュティ方言ではこのような **нъ** の使用例は比較的少数ではあるものの³⁰、特定の表現に限定されずに用いられることから、それが対格標示という文法的機能・意味を獲得したものと考えることができる。そしてこのような機能面における変化は、明らかにルーマニア語の **pe** の文法的な意味の転移によって生じたと考えられる³¹。文法的な意味の借用によって生じる機能面の変化は、借用スケールでカテゴリーⅢに相当する (Thomason & Kaufman 1991: 82)。

以上より、ルーマニア語の対格標識の前置詞 **pe** を手掛かりに、対格標識 **нъ** の借用はもちろんのこと、対応する前置詞 **нъ** は新たな文法的意味を獲得した。加えて、非接語形の人称代名詞に対しては、**нъ** と同一指示の接語形で二重に標示する文法形式を確立した。目的語に一致する接語形代名詞を新たな屈折接辞とみなし、それによって新たな文法カテゴリーの導入(カテゴリーⅣに相当)とみなすことができるかについてはまだ議論の余地がある。したがって、このようなルーマニア語に由来する構造的な借用は少なくとも借用スケールのカテゴリーⅢ(～Ⅳ)に相当するものと考えることができる。

3.2.5. 統語構造の借用

統語論のレベルにおけるルーマニア語からの構造的な借用としては、ルーマニア語をモデルとした修飾語の語順の変化を挙げることができる。

ブルガリア語では一般的に修飾語は被修飾語に先行する語順をとる。しかし、ブラネシュティ方言では、以下(7)のように被修飾語が修飾語に先行する例が広くみられる。

- (7) а. Ше имами з'има т'ешка. (TO)
 FUT have.PRS.1.PL winter.F.SG hard.F.SG
 「厳しい冬がやってくる。」

³⁰ Младенов (1993: 381) も、一般論としてルーマニアのブルガリア語諸方言では、その使用が制限的であることを指摘している。

³¹ Heine & Kuteva (2005: 2) は、このような文法的な意味・機能の転移を「文法的複製 (grammatical replication)」と呼んでいる。

b. Имам инне пиленца малки. (TM)

have.PRS.1SG a.PL chicken.PL small.PL

「小さな鶏を持っている。」

(7) では、いずれの例も形容詞が被修飾語に対して後置される語順をとっている。これは (7b) のように不定冠詞に相当する *инне* (< *един*) が用いられる場合も同様である。このような語順は以下 (8) に見られるようにルーマニア語で一般的に用いられる語順と合致する。

(8) a. *fată* *frumoasă*

girl.F.SG beautiful.F.SG

「美しい女の子」

b. o *fată* *frumoasă*

a.F.SG girl.F.SG beautiful.F.SG

「ある美しい女の子」

このような語順は標準ブルガリア語では一般的ではないが完全に排除されるものでもない (cf. Попов и др. 1983: 285–286, etc.)。しかし、標準ブルガリア語との決定的な違いは、(7) のような修飾語が後置される語順が、修飾語が前置される語順と比較してより頻繁に用いられる点にある。Суган (2016a: 111–112) によれば形容詞が用いられている名詞句 535 例中 301 例が後置の語順であり、前置の語順の例数を上回ることが確認されている。このことはまた、形容詞が後置される語順が必ずしも有標なものではないことを示唆する。

後置不定冠詞が用いられる場合には、名詞句の中で先行する要素、すなわち名詞に対して用いられることになる (9a)。このような語順は標準ブルガリア語でも同様である³²。

³² 例えば、以下 (i) のブルガリアの国民的詩人フリスト・ボテフの詩の一節では、修飾語が後置されているが、このとき後置不定冠詞は先行する名詞のほうに付されている。

(i) *Звезди обиспят свода небесен.*

star.PL cover.PRS. 3PL vault. M. SG.DEF heavenly.M. SG

「星々が天空を覆っている。」(Хр. Ботев; Попов и др. 1983: 286)

- (9) a. Br. Ний гуварими из'ик'-о български
 we.NOM speak.PRS.1PL language.M.SG-DEF Bulgarian
 нь с'илать. (DD)
 of village.DEF.PL
 「我々はこの村のブルガリア語を話している。」
- b. Ro. limb-a bulgară
 language.F.SG-DEF Bulgarian.F.SG
 「ブルガリア語」

ルーマニア語においても、名詞句中で後置定冠詞を得るのは先行する語の方のみである。したがって、通常は (9b) のように名詞のほうが後置定冠詞形になり、後続する形容詞は無冠詞である。

指示代名詞も被修飾語の名詞に対して後置される語順をしばしばとる。このとき先行する名詞は後置冠詞形となる。

- (10) Къшть-тъ тъс той йь ньпрай. (TM)
 house.F.SG-DEF this.F.SG he.NOM it.F.SG.CL make.AOR.3SG
 「この家は彼が建てた。」

ルーマニア語でも同様の名詞句の構造を見出すことができる、すなわち指示代名詞が後置冠詞形の名詞に後置される語順である (Ro. *cas-a aceasta* 「この家」)。その一方で、指示代名詞が名詞に先行するような語順も用いられる (Ro. *această casă* 「この家」)。ただし、この場合の名詞は後置冠詞形にならない。さて、Суган (2016a: 111) によれば、ブラネシュティ方言では 519 例中 255 例で指示代名詞が後置される語順が見られるという。つまり、全体のおおよそ半数であるわけで、当該の語順のモデルが決して珍しいものではないことがわかる。この語順モデルがブラネシュティ方言において生産性を獲得した背景には、ルーマニア語の指示代名詞を伴う名詞句の統語構造の借用があると考えられる。

所有代名詞も被修飾語の名詞に対して後置される語順を取りうるが、

Суган (2016a: 111) によれば, 639 例中たったの 83 例しか見られないというから, 前置の語順に比べると圧倒的にその用法が制限的であるという印象を与える。なお, このとき先行する名詞はやはり後置定冠詞形となるのだが, 後置される所有代名詞もまたもっぱら後置冠詞形で用いられるため (cf. Кочев1969: 61; Младенов 1993: 274), 修飾語と被修飾語の両方に後置冠詞が用いられる独特な構造が実現することになる³³。

- (11) Съ дърти пъринци-те той-те? (ТО)
 be.PRS.3.PL old.PL parents.PL-DEF your.PL-DEF
 「お前の両親は年寄りか。」

このとき名詞句内において定性が“二重に” 標示されることになる。ルーマニア語ではもっぱら後置の語順が用いられるが, 先行する名詞が後置冠詞形になるのみで, (11) のブラネシュティ方言の例にあるような定性の二重標示はされない (cf. Ro. *părinții tei/ *tei-i* 「お前の両親」)。

所有代名詞の場合に後置の語順が極端に制限されることは, ルーマニア語の統語構造の影響が一部にとどまっていることを示唆する。その理由についてСуган (2016a) は特に言及していないが, 次のようなことが背景にあると推測できる。すなわち, 修飾語が後置される場合に後置冠詞は名詞句内で先行する要素にのみ用いられるという, ブルガリア語とルーマニア語に共通する名詞句の統語構造上のルールが破られてしまうことである。すでに述べたように, これはブラネシュティ方言で所有代名詞が常に後置定冠詞形で現れることによって引き起こされる。形容詞や指示代名詞の場合に後置する語順がより普及した背景には, ブルガリア語としてもともと同様の統語構造が稀

³³ 標準ブルガリア語でも所有代名詞が名詞に対して後置される語順は見られるものの, 倒置の語順は極めてまれである。以下, (i) にあるように, 所有代名詞が後置される場合, 名詞のほうが後置定冠詞を持つ。その一方で, 所有代名詞自体は無冠詞である。

(i) На деди-те наши добродетелта да продължим.
 of ancestor.PL-DEF our.PL virtue.F.SG.DEF SMP continue.PRS.1.PL
 「我らの祖先の気高さを(持ち)続けよう。」(Попов и др. 1983: 286)

に用いられるに過ぎないとはいえ存在していたためブラネシュティ方言にも受容されやすかったのだと考えられる。

ここで見たブラネシュティ方言における修飾語の語順の変化は、いずれもルーマニア語の名詞句の統語構造の借用を通じて生じたものと考えることができる。Thomason & Kaufman (1991: 84) は、形容詞の名詞に対する語順の倒置の例を、借用スケールのカテゴリーⅣに含めている³⁴。ゆえに、ブラネシュティ方言に見られる形容詞などの修飾語の語順の変化もこのカテゴリーに含めて良いであろう。

3.2.6. 分析のまとめ

ここまでの分析を通じて、ブラネシュティ方言はルーマニア語との接触による影響を強く被っていることが確認された。

まず、語彙の借用については、多岐にわたる内容語の借用は当然のことながら、接続詞や前置詞といった機能語の借用も多数認められた。その中には、翻訳借用による例も多くみられたことも、比較的強度の言語接触が行われてきたことを示唆する。

次に、動詞の語幹形成に用いられる接尾辞 *-’аскъ-* や不定代名詞を形成する派生接辞 *ori-* などの拘束形態素の借用が見られるが、特に後者はブルガリア語固有の語彙に対しても適用される点で特筆に値する。一方で、曲用・活用に際して用いられる語尾、すなわち屈折接辞の借用は見られなかった。しかも、ブルガリア語の語彙に対してはもちろんのこと、ルーマニア語からの借用語に対しても、もっぱらブルガリア語本来の語尾が用いられている。

さらに、ルーマニア語で対格標識としても用いられる前置詞 *pe* の借用は、ブラネシュティ方言の文法構造に大きな影響を与えた。*pe* に対応する *пъ* の借用による対格標示の手段の獲得はもとより、語彙的な意味が対応するブルガリア語本来の前置詞 *нъ* にもその影響が波及し、*пъ* と比べて使用頻度は幾

³⁴ ロマンシュ語の「名詞＋形容詞」の語順が、スイスドイツ語の構造的な借用により（部分的に）「形容詞＋名詞」の語順によって代替される事態を例に挙げている（Thomason & Kaufman 1991: 84, cf. Weinreich 1968: 38）。

分制限的ではあるものの *пъ* と同様の文法的機能（対格標示）を獲得することとなった。また、*пъ* によってひとたび標示された直接補語は、まだ文法として完全に確立していないがゆえに幾分随意的な用法ではあるものの同一指示の接語形人称代名詞によって二重化することで、聞き手の理解を保障するような構造の発展を促すこととなった³⁵。このとき、その構造がもっぱら語用論的な用法にとどまっているグレーベン方言（及びその上位方言にあたるミジャ方言群）と比較して（Сугай 2017b; Sugai 2019, etc.），ブラネシュティ方言のそれは明らかにルーマニア語のモデルにしたがって文法化を進めている（Sugai 2018; cf. Sugai 2019）³⁶。

最後に、形容詞や指示代名詞、所有代名詞などの修飾語が、被修飾語の名詞に対して後置されるという語順は、ルーマニア語のそれと著しい類似を示すものである。ブラネシュティ方言に見られるこれら後置の語順はブルガリア語本来の語順として完全に排除されるようなものではないが、標準語とは異なりその使用は文体的な動機などによって制限されるものではない。ブラネシュティ方言において、所有代名詞の場合を除き、修飾語が後置される語順が頻用されるという事実は（cf. Сугай 2016a），ルーマニア語名詞句の統語構造の借用によってもたらされたとみなすことができる。

本稿で述べた、ブラネシュティ方言における言語接触による影響を、Thomason & Kaufman（1991）の借用スケールに照らし合わせると、おおむねカテゴリーⅢに相当するものと判断できるが、修飾語の被修飾語に対する語順の変化のような、ルーマニア語の統語的な構造の借用の存在は、ブラネシュティ方言の接触の程度をカテゴリーⅣに近づけるけるものである。しかし、ルーマニア語の語順モデルに従って修飾語の統語構造が完全に置き換わって

³⁵ Sugai（2018）では、ブラネシュティ方言に見られるこの構造を、Heine & Kuteva（2005）が提示する言語接触による文法化の枠組みで分析を行い、当該の構造の文法化がルーマニア語との接触によって推し進められたことを明らかにした。

³⁶ 加えて、本稿では分析対象としなかったが、自動詞から形成される受動過去分詞を用いた現在完了の複合形の形成もまたルーマニア語との接触による構造的な借用と考えることができよう（cf. Sugai 2020）。

しまうほどインパクトのあるものではないほか、カテゴリーⅣに特徴的な屈折接辞の借用が見られなかったことなどを考慮すると、全体としてはカテゴリーⅢとみなし、Ⅳとの境界線にあると見るのが無難であろう。

ブラネシュティ方言話者がルーマニア語をも用いるバイリンガル話者であることから、極めて強度の接触による影響を言語面で見て取れるであろうと仮定していたが、実際には借用スケールでカテゴリーⅢ（～Ⅳ）にとどまることが確認された。このことから、ブラネシュティ方言とルーマニア語の接触は比較的強力なものとみなすことができるものの、ブラネシュティ方言やその話者に対する文化圧力がカテゴリーⅤに到達するほど強大なものではなかったことが推測される。

4. 終わりに

本稿では、ブラネシュティ方言に見られる言語構造の変化に着目し、Thomason & Kaufman (1991) による言語接触に関する類型論的な枠組みを用いた分析を行った。その結果、語彙の借用だけでなく、拘束形態素や文法形式・意味、統語構造などの構造的な借用も行っていることが確認されることから、同方言が比較的強い接触にさらされていたことを明らかにした。その一方で、借用スケールでカテゴリーⅣに相当する言語変化は限定的で、ブルガリア語の文法体系は総じてよく維持されており、類型論的な変化をもたらすような構造的特徴は概して見られなかった。それゆえ、ブラネシュティ方言では、借用スケールのカテゴリーⅢ（～Ⅳ）に相当する程度の接触が生じてきたと結論付けた。また、ブラネシュティ方言話者に対して働いている同化に向けた文化・社会的圧力もまた、圧倒的と言えるほど強力なものではなかったと推測されることも指摘した。

ブラネシュティ方言の言語維持とシフトの問題については、社会言語学的な視点からのさらなる調査や分析が不可欠であることは言うまでもない。例えば、言語シフトが進む現在の言語状況が生じた社会的背景、アイデンティティや言語意識の問題などを総合的に明らかにしていく必要がある。加え

て、異なる言語状況にある他のブルガリア系集落との比較も示唆に富むものと推測される (cf. Герова 2016; Nomachi 2020; Сугай (forthcoming), etc.)。この点については今後の課題とする。

略語一覧

ACC = accusative, AM = accusative marker, AOR = aorist, CL = clitic, DAT = dative, DM = dative marker, DEF = definite (article), F = feminine, FUT = future tense marker, IMP = imperative mood, IMPF = imperfect, IND = indicative mood, M = masculine, N = neuter, NEG = negation marker, NOM = nominative, PL = plural, PRS = present, REF = reflexive, REL = relative pronoun, SG = singular, SMP = subordinating modal particle, SUB = subjunctive mood

参考文献

- Atlas (2011–2012): *România. Atlas rutier și turistic*. 2011–2012, House of Guides.
- Bolocan, Gh. (1958) “Cu privire la corelația de sonoritate în graiul bulgar din comuna Brănești”, *Studii și cercetări lingvistice*, 4, 491–495.
- Heine, B., T. Kuteva (2005) *Language Contact and Grammatical Change*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Matras, Y. (2009) *Language Contact*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Nomachi, M. (2020) “Language Loss and Preservation: The Case of Banat Bulgarian in Serbia”, *Balkanistica* 33, 289–318.
- Roman, L. (1984) “Așezări de bulgari și alți sud-dunăreni în Țara Românească (1740–1834)”, *Relații româno-bulgare de-a lungul veacurilor. Studii*, vol. II, 126–143.
- Sobolev, A. N. (2008) “On Some Aromanian Grammatical Patterns in the Balkan Slavonic Dialects”, In B. Sikimić, T. Ašić (eds.) *The Romance Balkans, Collection of papers presented at the international conference The Romance Balkans, 4–6 November 2006*, Belgrade: Institute for Balkan Studies, Serbian Academy of Sciences and Arts, 113–121.
- Sugai, K. (2018) On Contact-induced Grammaticalization of the Clitic Doubling Construction: A Case of the Bulgarian Northeastern Dialect in Romania, In E. Gutiérrez Rubio et al. (eds.) *Contributions to the 21st Annual Scientific Conference of the Association of Slavists (Polyslav)*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 272–281.
- . (2019) “Areal Diffusion of Clitic Doubling of Objects: A Case Study of Bulgarian Moesian Dialects”, *Slavia Iaponica*, vol. 22, 247–267.

- . (2020) “Past Passive Participles of Intransitive Verbs in the Language of the Bulgarian Minority in Romania: A Closer Look at Contact-induced Grammatical Change *Našite bălgari să dojdeni or dušeli?*”, *Zeszyty Łużyckie* 54, 51–65.
- Thomason, S. G. (2001) *Language Contact: An Introduction*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Thomason, S. G., T. Kaufmann (1991) *Language contact, creolization, and genetic linguistics*, Paperback Ed., Berkeley: University of California Press.
- Weinreich, U. (1968) *Languages in contact: Findings and problems*, Hague/ Paris: Mouton.
- Алексова, В. (2004) *Румънска диалектология*, София: УИ „Св. Климент Охридски“.
- Велики, К., В. Трайков (1980) *Българската емиграция във Влахия след руско-турската война 1828–1829, сборник от документи*, София: Издателство на БАН.
- Гегова, И. (2016) За езиковата ситуация в румънски банат. *Проблеми на социолингвистиката*, XII, 341–346.
- Димчев, К. (1974) Морфологично-синтактични модели, установени под румънско влияние в българския говор на с. Валя Драгулуй (Румъния), In Л. Андрейчин (ed.), *В памет на професор Стойко Стойков (1912–1969) Езиковедски изследвания*, София: БАН, 255–259.
- Еников, Зл. (1983) *История на Калипетрово. Силистренски окръг*, Калипетрово: Кметство с. Калипетрово.
- Жечев, Н. (1983) Към историята на изучаването на българските емигрантски заселища в Румъния през Възраждането. (По случай 100 години от рождението на акад. Стоян Романски), *Българска етнография*, кн. III, 51–60.
- Кочев, Ив. (1969) *Гребенският говор в Силистренско: С особен оглед към лексикалната му система. (Трудове по българска диалектология, кн. V)*, София: Издателство на БАН.
- Кочев, Ив. и др. (2001) *Български диалектен атлас, обобщаващ том, I–III Фонетика, акцентология, лексика*, София: Книгоиздателска къща „Труд“.
- Милетич, Л. (1989) *Източнобългарските говори*, София: Издателство на БАН. (Translated from L. Miletich (1903) *Das Ostbulgarische*, Wien: A. Hölder)
- Младенов, М. Сл. (1993) *Българските говори в Румъния*, София: Издателство на БАН.
- Младенов, М. Сл. (2008) Няколко лексикални румънски заемки в североизточните български говори (По данни от Българския диалектен атлас, т. II, 1966), In *Диалектология, балканистика, етнолингвистика (Лингвистично наследство)*, 307–311, София: УИ „Св. Климент Охридски“.
- Ницолова, Р. (2008) *Българска граматика. Морфология*, София: УИ „Св. Климент Охридски“.
- Попов, К. и др. (1983) *Граматика на съвременния български книжовен език*, Том III,

- Синтаксис, София: Издателство на БАН.
- Стойков, Ст. (1993) *Българска диалектология*, София: Издателство на БАН.
- Сугаи, К. (2014) Удвояване на допълнението в българския говор на с. Брънещ, Румъния, *Проблеми на социолингвистиката*, XI, 115–120.
- . (2015 а) Към въпроса за удвояването на прякото допълнение в българския говор в Румъния (Анализ в съпоставка с румънския език), In М. Младенова et al. (eds.), *Движение и пространство в славянските езици, литератури и култури. Сборник от Дванадесетите международни славистични четения, София, 9-10 май 2014*, Том първи, София: УИ „Св. Климент Охридски“, 94–102.
- . (2015b) За някои специфични характеристики на местоименните клитики в гребенския говор в Румъния, *Българска реч*, 10 (2), 102–109.
- . (2016 а) Към въпроса за постпозитивните определения в гребенския преселнически говор в Румъния. In А. Кочева (ed.), *Професор Иван Кочев — Живот, отдаден на езикознанието, Юбилеен сборник*, София: Издателство на БАН „Проф. Марин Дринов“, 108–113.
- . (2016b) Структура удвоения допълнения по модели левой дислокации в болгарском переселенческом диалекте в Румынии, *Славянский альманах*, 2016, Вып. 3–4, 344–354.
- . (2017a) Структура и прагматична функция на удвояването в гребенския преселнически говор, In М. Стефанов и др. (eds.), *Мултикултурализъм и многоезичие, Сборник с доклади от Тринадесетите международни славистични четения - София, 21–23 април 2016 г.*, Том I. Лингвистика, Велико Търново: Издателство „Фабер“, 211–221.
- . (2017b) Удвояване на допълнението и граматикализация в светлината на ареалната лингвистика, *Studia Philologica Universitatis Velikotarnovensensis*, 36 (1), 49–58.
- . (forthcoming) Съвременната езикова ситуация в Паркан, Молдова, In Bednarska, K., et al. (eds.) *Contributions to the 23rd Annual Scientific Conference of the Association of Slavists (Polyslav)*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 347–356.
- Тетовска-Троева, М. (1986) Мизийски говори, In Е. Георгиева, Н. Тодорова (eds.), *Българските народни говори (Поредица знания за езика, т. VI)*, София: Държавно издателство „Народна просвета“, 34–37.
- Тетовска-Троева, М. и др. (2016) *Български диалектен атлас, обобщаващ том, IV, Морфология*, София: Издателство на БАН „Проф. Марин Дринов“.
- Шклифов, Б. (1973) *Костурският говор, принос към проучването на югозападните български говори (Трудове по българска диалектология, кн. 8)*, София: Издателство на БАН.

* 本論文は、科学研究費補助金・若手研究（研究代表者：菅井健太，課題番号：19K13175）による研究の成果である。